

【論文】

アルヒーヴ資料から見る 1930年代のソヴィエト建築界の動向

鈴木 佑也

[Резюме]

О ситуации в советском архитектурном сообществе 1930-х гг.
на основе архивных материалов

СУДЗУКИ Юя

Цель данной статьи показать примеры использования архивных материалов в ходе исследований в области советской архитектуры 1930 гг. В работах предыдущих исследователей направление или тенденции советского архитектурного сообщества трактовались на основе анализа журналов и архитектурных произведений того времени, а также на оценке взаимоотношений между архитекторами того времени и политикой.

После постановления ЦК ВКП(б) «О перестройке литературно-художественных организаций» от 23 апреля 1932 года все направления советского искусства были призваны объединиться под руководством партии. Процесс такого объединения требовал разработки соответствующего нового стиля во всех областях искусства, в том числе и в области архитектуры. Однако, в ходе изучения архивных материалов ВОКСа (Всесоюзного Общества Культурной Связи с заграницей) и ЦИК СССР (Центрального Исполнительного Комитета СССР), хранящихся в ГАРФ (Государственном Архиве Российской Федерации), фонде ССА (Союза Советских Архитекторов) и в РГАЛИ (Российском Государственном Архиве Литературы и Искусства), становится понятно, что на тот момент в области архитектуры подобный стиль еще не был утвержден, и советское архитектурное сообщество проявляло интерес к различным стилям и направлениям.

Для иллюстрации всего вышесказанного в данной статье рассматриваются три примера: 1) связь архитектурного проекта «Дворца Советов» с архитектурой американских небоскребов, 2) взаимоотношения немецкого архитектора Бруно Таута, имевшего крепкие связи с японской архитектурой, с советским архитектурным сообществом в 1930 гг., 3) приглашение в Москву известной мировой архитектурной ассоциации, Международного Конгресса Современной Архитектуры (CIAM: Congrès International d'Architecture Moderne), состоявшей из знаменитых архитекторов, поддерживающих современное

направление в искусстве.

キーワード：建築、全体主義、交流、ソヴィエト、アメリカ

はじめに

1930年代のソヴィエト建築史についての研究では、作品分析はもちろんのこと政治とのつながりも強く考慮されている。1932年以降の「文学・芸術組織の再編に関する」共産党中央委員会の決議があることから、建築家及び建築プロジェクトに対する政治介入の度合いが何かしらのかたちで慮られているのである。これは政府・ポリシェヴィキ指導のもと、統一的な方向性を確立し、その方向性に従ってあらゆる芸術家が社会主義建設へ奉仕することを意味するものであった。この結果、これ以前に存在していた数多くの芸術家団体は解散し、同盟という名の組織に組み込まれることとなる。同様に建築界においても個々の建築家並びに建築プロジェクトの位置付けが行われているため、建築家個人の創作経歴や当時の建築界の状況を基に考察されることが多くなるのである。本稿でも、主に政治並びに経済の動向を把握するために用いられる当時の政治文書を用いて、直接的に政治とのつながりを探ることが狙いである。具体的には以下の点に注目していくことにする。

1) 作品分析以外、とくにアルヒーフ資料で当時のソヴィエト建築界の動向、またはソヴィエト建築界において国家的な建築様式がいかにして探求されていたか。

2) 1930年代半ばから芸術分野において全体主義的な傾向、つまり政府による統制ないしは政府が打ち出した方針に芸術分野が従属するようになるが、この点は同時代のドイツやイタリアにおいても共通する。その中で典型的とされるドイツにおける古典主義建築（または歴史主義建築）への傾倒はイタリアやソヴィエト建築界に完全に当てはまるわけではない。しかし、ソヴィエト建築界では実際の設計や建築雑誌での論争、または建築関連の会議ないしは大会での決議等を経て、「古典の習得」という表現がスローガンとなる。そのため同時期のドイツ建築のような潮流と、表面的には相似する面も見られる。

だが、それと対立関係にある現代建築、とくにソヴィエト国内のものではなく国外のものが積極的に取り入れられていたという事実はあまり知られていない。こうした差異をダブルスタンダードと定義するのであれば、社会主義リアリズム制定後に確立しようとしていたソヴィエト建築様式は建築様式として一貫性を持たないものであり、むしろ建築運動として位置付けるべきではないか。

3) 全体主義というシステムにおける建築分野の特徴は、このシステムの定義、つまり他を排除するという定義に当てはまるのかどうか。これを、2-3の例からではあるが検証する。また、2)と関連して一貫性がないながらも、ある種のイデオロギーによって統一的な方向性、例えば政府の基本路線に逆らうものは排除されていたと考えられるため、この点を全体主義システムの本質の現れとして位置付けることも可能であろうし、それによって全体主義建築と名付けるかどうか。この点をより深く考察するための手がかりを見出すこと。

以上のことを検証するために、本稿では三つの事例を取り上げていきたい。一つ目は既に多くの研究がなされている建築プロジェクト、ソヴィエト宮殿である。この建築プロジェクトの競技設計は1931年から33年まで行われ、公開競技設計には当時名声を博していた外国

人建築家が参加し、またソヴィエト国内からも数多くの応募があるなど、当時としては最大規模のものであった。そのため、この競技設計に提出された設計案の分析とそれを基にしたこの競技設計自体の考察、またはソヴィエト建築史の中での位置づけに関する研究が多くなされてきた。しかし、競技設計そのものの分析からでは見逃される傾向にある事実をアルヒーヴ資料による分析から確認することができる。

二つ目に取り上げるのはドイツ人建築家ブルーノ・タウトとソヴィエト建築界のつながりである。彼は1930年代に日本に滞在した際に日本建築に関する著作を記し、その日本語訳も出版されている。彼と日本とのつながり、または外国人建築家の観点から見た当時の日本建築という観点から、彼の日本滞在はしばしば研究対象に取り上げられている。この日本滞在前に彼はソヴィエトに二度滞在しており、日本での滞在に比べ期間は短かったものの、二度目のソ連滞在時にはいくつかの設計にも取り組んでいる。また日本滞在時においてもソヴィエトとの交流は続いているが、彼の日記からではそれについて知ることができず、アルヒーヴ資料によって初めて詳しい事実を知ることができる。

最後に取り上げるのは、現代建築を推進していた国際的な建築家団体、現代建築国際会議（Congrès International d'Architecture Moderne、以下 CIAM と略記）とソヴィエト建築界のつながりである。1930年代の半ばからソヴィエト建築界では現代建築（モダニズム建築）は非難を浴び、「過去のもの」として扱われるようになる。だが、上記の団体との交流が水面下で行われており、この団体が組織する国際会議がモスクワで開催される予定もあった。それは最終的には実現に至らないが、その後も1937年頃までこの団体とソヴィエト建築界の交流は断続的に行われている。だが、当時の建築雑誌や情報媒体からこの事実を知ることができず、アルヒーヴ資料によってのみ知ることができる。またここからは、歴史主義建築に傾倒していたと考えられていた当時のソヴィエト建築界の異なる側面をも知ることができるのである。

1. ソヴィエト宮殿

ソヴィエト宮殿の建築競技設計は、従来の研究においてアヴァンギャルドの流れから歴史主義への傾倒ないし古典建築への回帰を決定付けたものとされている。この建築競技設計は非公開競技設計3回、公開競技設計1回と全部で4回開催され、その中の2巡目は国際競技設計で当時の有名な建築家を招待した競技設計であった。本来は2巡目の国際競技設計で最終案を決定する予定であったが、選考委員会の気に入る設計案はなく、その中でも好ましいとされる設計案に賞を授与し、受賞者もしくは組織側が選定した建築家に再び設計案を提出させ、その中から最終案を選ぶことになった。国際公開競技設計では、当時のヨーロッパで影響力を持っていた現代建築家らが提出した設計案は参考案として受賞対象とはならず、また現代建築（アヴァンギャルド建築ないしはモダニズム建築）の特徴が取り入れられた設計案は、入賞はするもののそれほど高く評価されることはなかった。またこの国際公開競技設計後に「過去の建築様式を新しいものとして利用すること」が競技設計運営側から助言として通達されている¹。3巡目と4巡目ではこの助言に従うかたちで多くの設計案に過去の建築様式、主に古典建築様式が取り入れられている。最終的にはB.イオファンの設計案が競技設計の勝利案として選定された。だが、あくまで最終案のための基本案として選ばれたの

であって、競技設計後の最終案作成段階では彼以外の建築家も共同設計に加わり、最終案の作成が行われ、その最終案を基に建造物の基礎部分が着工されることになる。しかし、1941年にすでに始まっていたドイツとの戦争のため建築資材を戦争用に回すことになり、この建築プロジェクトは基礎部分が完成した段階で凍結される。第二次大戦後は戦後復興が重視されたため、1940年代後半に建造されるモスクワの高層建築物にこの建築プロジェクトの理念が応用されただけで、最終的には土台部分を残し、ソヴィエト宮殿は完成しなかった。これが従来の研究における大まかな理解である。

簡潔にまとめるのであれば、この建築プロジェクトは1. 競技設計における現代建築のながれと古典建築回帰への分岐点となったもので、2. 実現はしなかったが、その理念が第二次大戦後のモスクワの高層建築群へと継承された、というのが一般的な理解であると言える。

この基本的性質に関連して、アルヒーフ資料を用いて再検証すると次のような側面が見えてくる。第一に、イデオロギ的の性質に焦点が当てられる傾向にあるが、競技設計後の最終案作成段階では建設技術的側面がより重要性を帯びていった点である。もちろん、建築プロジェクトの着工を視野に入れば、それは当然のことである。例えば、国際公開競技設計（競技設計2巡目）において、運営者側の技術専門家委員会が当時ゴスプロジェクトと契約してソヴィエト国内のトラクター工場の建設に従事していたアメリカの設計事務所「Albert Kahn Inc.」に設計案作成を委ねるといふ決定がなされていることや、アメリカの最新設計技術を習得するため、競技設計が終わる前にソヴィエト専門家のアメリカへの派遣が検討されていた²。

また、競技設計後には、建築プロジェクトの着工を控えてより技術的側面の重要性が増すようになる。競技設計後から建設工事の凍結、さらには第二次大戦後この建築プロジェクトが正式に取りやめになるまで何度か最終案が策定されている。こうした数度にわたる変更は、建造物規模の拡大ないしは縮小といった決定が行われたためである。競技設計後のB. イオフアンによる設計案から大きな変更が加えられたのは1934年に提出されたものと1937年に提出されたものであるが、この前後に設計に携わる建築家並びに技術者が二度に渡り長期でアメリカへ渡航し、その中で建設技術に携わる専門家や企業と交流を深め、専門的な助言を受けている。加えて主任建築家の一人となったB. イオフアンは競技設計後すぐにアメリカの大都市、特にニューヨークにおける摩天楼建築の情報を当時アメリカに滞在していたソヴィエトの建築家、V. オルタルジェフスキイから集め、その中でもロックフェラーセンタービルに関する建築構造や工期に関して尋ねている³。こうした経緯から、1938年のソヴィエト人民委員会付属ソヴィエト宮殿建設委員会の決議ではアメリカの高層建築物の建築構造と製作方法を学ぶことを目的として、再びアメリカへ専門家を派遣することが正式に認められている⁴。

このように、ソヴィエト宮殿建設に関する技術的な解決策を模索する上で最も有効だったのはアメリカの摩天楼建築であり、当時のソヴィエト建築界の流れとはやや異なる形でアメリカのアール・デコ様式がこの建築プロジェクトで用いられていくことになる。また、この建築プロジェクトの任にあっていたソヴィエト宮殿建設局は建設作業が凍結されてから1945年までにモスクワ以外の都市の資材工場建設、モスクワでは国立図書館の建設を受け持っている⁵。また、第二次大戦後にソヴィエト宮殿プロジェクトが正式に打ち切られるま

では、1940年代後半からモスクワで始まる高層建築群の建設を担当している⁶。こうしたことを考慮すると、当時の最新建設技術への志向、こう言ってよければアメリカ建設技術への志向が建築競技設計後のソヴィエト宮殿に影響を与えていたことは明らかであり、外見ないしはイデオロギー的側面からのみ取り上げられるモスクワ高層建築群とソヴィエト宮殿の同一性もアルヒーヴ資料を基にすることで、史実として説明することが可能となる。

2. ブルーノ・タウトとソヴィエト建築の関係性

ブルーノ・タウトは我が国に1933年から36年にかけて滞在している。その際に彼が従事した建築設計は数少ないが、一方で日本文化ないしは建築文化に関する著述を数多く残した。彼は歴史的建造物を現代建築の観点から再評価しており、1930年代後半から日本で生じる国家建築様式論争の一翼を担う潮流を援護することになる。この一翼は日本の伝統建築様式に現代建築の観点からアプローチすることで、無駄な装飾を省き、機能性を重視して構成されたものという解釈を打ち出した。この一翼から前川國男や丹下健三といった建築家達が登場する。

B. タウトは日本滞在中に自らの日記で日本に来る前にソヴィエトで建築活動を行っていたことやその印象について記している。ここでは日記からはなれて、史実として彼がソヴィエトで行ったことを紹介する。彼は1932~33年の短期間であるが、モスクワに滞在し、モスクワ市ソヴィエトからいくつかの建造物の設計と新都市の都市計画を委託されることになっていた。当時、B. タウトのみならずドイツからはエルンスト・マイ（フランクフルト・アム・メイン）、ハンネス・マイヤー（デッサウ）といったような都市計画ないし建築分野の専門家がソヴィエト政府の委託により建築活動を行っていた。こうした中でB. タウトはモスクワの中心部に計画されたインツェリスト・ホテル（現在のホテル“モスクワ”）と第二議会議ビル（現在の国会ビル）、そしてこれらを含む地区の設計案を依頼されている⁷。B. タウトは1920年代半ばにジートルングと呼ばれる労働者向け集合住宅の建設に携わる一方で、芸術表現によるユートピア社会実現の可能性について期待を寄せていた。この点は1919年に彼が製作したスケッチをまとめた本「アルプス建築」の中で確認できる。こうした自らの経験（労働者住宅）と期待（芸術表現による新たな社会実現の可能性）からB. タウトは1932年に二度目のモスクワ入りを果たす。しかし結果として、モスクワ中心部のアホートヌイ・リャトの地区計画とホテルの設計案は1933年のソヴィエト建築家同盟年度報告書で酷評され⁸、彼に代ってL. サヴェリエフとO. スタプランが設計を担当することになり、最終的にはA. シチューセフの設計案に基づきホテルの建設が行われる。タウトはこの設計案以外にも幾つかの設計を依頼されていたが、ソヴィエト建築界の古典建築への回帰的な傾向を察知し、モスクワでの活動を断念してドイツに戻り、そしてすぐ日本の建築家の招きで日本へ亡命することになる。

日本でのB. タウトの業績や軌跡は割愛するが、日記から見えてくる彼のソヴィエト建築界の印象はあまりいいものではない。また、来日当初は現代建築の旗手として歓迎されたタウトであったが、実作品の設計はほとんどなく、3年後にトルコから招待を受けて日本を離れ、トルコの現代建築の礎を築く途上でその人生を閉じることになる。こうした事実を踏まえれば、B. タウトはソヴィエト建築界とのつながりを断ち切り日本へ渡ったように見える。

しかし、アルヒーフ資料に目を通すと、B. タウトは必ずしもソヴィエト建築界とは縁を切っていないことがわかる。

日本滞在中の B. タウトの活動は、もちろん当時の日本の建築界では紹介されていたが、ソヴィエト建築界においては公には知られていなかった。しかし、ソヴィエト建築家同盟のアルヒーフには、ソヴィエト建築界が彼の日本滞在時の動静を把握していたことを示す資料が存在する。また、彼が日本で執筆した原稿が執筆後すぐにロシア語に翻訳されて届けられていたことを示す資料も存在する。ここで興味深いのは、その文書は B. タウト自身やソヴィエト建築界の誰かが日本から送ったのではなく、日本滞在記に記されている「親友」の一人ヴァルバラ・ブブノヴァが送っているということである⁹。またその送り先は、当時ソヴィエト建築界ならびに美術界で発言権を持っていた批評家ダヴィド・アルキンである¹⁰。彼は当時ソヴィエト建築界の対外窓口として多くの有名国外建築家と交流を持っていた。V. ブブノヴァがタウトの許可を得て彼の執筆原稿をソヴィエトへ送ったのか否かは不明だが、V. ブブノヴァはタウトの日本における建築活動をソヴィエト建築界に逐一報告していたことがわかる。V. ブブノヴァと D. アルキンが以前より互いに知己を得ていたのは確実で、1931 年に出版された D. アルキンの著作 "За японским морем" においてその関係性が理解できる。また、当時のソヴィエト建築界では 1934 年頃からソヴィエト主導の国際的な建築家会議「第一回全ソヴィエト建築家大会」が企画されており、欧米のみならず日本やトルコからも一線で活躍する建築家を招聘しようとしていた。その招聘リストに B. タウトの名が挙がっているが¹¹、この招聘建築家の選定には D. アルキンが関わっていた。そのため、好ましくない評価を与えたにも関わらず、B. タウトの動向をソヴィエト建築界、その対外窓口であった D. アルキンは知っていたのである。結果としてこの第一回全ソヴィエト建築家大会にタウトが招聘されることはなかったが、ソヴィエト建築界にとって、B. タウトは気にかかる存在であり、それゆえ彼の日本滞在時の動静が報告されていたのである。

また、タウトが日本を離れてトルコに向かう際にモスクワに 4 日間滞在中に¹²。この間に彼はモスクワ中心部を散策し、その感想を同行していた対外文化協会職員に語っている。その中では、当時建造された建築物は「いい加減な作品 (халтура)」であり、そうしたものを主導するソヴィエト建築界は「盲目的にアメリカ建築に追従している (слепо подражает Америке)」と断罪している。それでも、トルコに渡ったのちも交流は途絶えることなく、彼の死の直前にはソヴィエト建築界へドイツ人建築家の斡旋を行っている¹³。

こうしたことから、B. タウトはソヴィエト建築界と縁を切ったということではなく、むしろ関係を保ちながらソヴィエト建築界の行く末を懸念していることがアルヒーフ資料から読み取れると言えよう。

3. CIAM とソヴィエト建築界

CIAM は 1927 年に現代建築を推進し、各国に広める目的で設立された。中心となった建築家ル・コルビュジェとスイスの芸術批評家ジークフリート・ギーディオンはヨーロッパ各地で定期的に国際会議を開催していた。1930 年にブリュッセルで開催された会議では、その次の国際会議をモスクワで開催することが決まり、CIAM とソヴィエト側で会議開催に向けた交渉が始まることになる。当時このことは公にされていなかったため、この件について

ソヴィエト側の建築関連情報媒体（雑誌、新聞等）から知ることはできない。近年の先行研究¹⁴によってこの事実が明らかになってきており、E. マンフォードの研究では CIAM 側の資料に、T. サモーヒナの研究ではソヴィエト側の資料に依拠した分析が行われている。ソヴィエト側の資料ではソヴィエト中央執行委員会のもとのソヴィエト建築家同盟のものが用いられている。これによって政府上層部の正式な決定とそれを巡るソヴィエト建築界の動きを考察することはできる。しかし、政府上層部で決定される以前に建築関連の諸機関がこの交渉と関連する協議を重ねていた。先行研究で用いられていない資料からはソヴィエト内部の建築関連諸機関の思惑を読み取ることができる。さらに、CIAM とソヴィエト側が企画した内容がその後 1937 年に開催される第一回全ソヴィエト建築家大会にそのまま利用されていることもわかる。

先行研究で取り上げられている事実関係は次のようになる。第四回の CIAM 会議候補地にモスクワが挙げられ、その告知がベルリンのソヴィエト大使館に送られている¹⁵。これは唐突に決められたものではなく、1932 年に予定された第四回会議のテーマが「機能的都市（функциональный город）」となり、このテーマに合う開催地としてアメリカないしはソヴィエトの都市が検討されていた。ベルリンの特別会議で行われたエルンスト・マイのソヴィエトでの活動報告や、CIAM が掲げていた「最小住居単位」、「合理的地区計画」が社会主義都市を通じて全世界においても通用するか否かに焦点が当たったことがモスクワ開催の決め手となったとされている¹⁶。この決定によって CIAM 側とソヴィエト建築家側の交渉が始まる。CIAM の定例幹部会（CIRPAC）メンバーは 1932 年 12 月にモスクワを訪問し、ソヴィエト側と直接交渉を行い、プログラム内容を話し合ったほか、ソヴィエトの建築家からソヴィエトでの都市計画に関する報告を受けている。またこの席で 1933 年 7 月にモスクワで国際会議を開催することが確定し¹⁷、ソヴィエト側はこれ以降様々な調整を行うようになる。しかし、1933 年 3 月 22 日付けのソヴィエト側からの CIAM 宛ての通知書において、1933 年 7 月モスクワ開催の延期の要望が伝えられる¹⁸。結果として、CIAM 側はモスクワの代わりにフランスとギリシアの間を航行する定期船「パトリス」で第四回会議を行っている。その次の会議をモスクワで開催するようソヴィエト側は CIAM に通達するが¹⁹、最終的に開催されることはなかった。

この延期理由は、通知書では「ソヴィエト側の準備が間に合わないため」とされている。ここで指摘しなければならないのは、この CIAM 側との交渉が始まった時期と同じくして全ロシア都市計画会議とそれに続いて第一回全ソヴィエト建築家大会の企画がおこなわれている点である。前者の会議の企画は 1932 年 6 月ごろから始まり、後者は 1934 年から始まっている。前者の都市計画会議は CIAM の国際会議と内容において多くの共通点が存在する。だが、そのテーマを踏襲しながらも、同じく CIAM が興味を持っていた社会主義都市（соцгород）が主題となり、それに関連した地区計画や当時各地で進められていた都市計画の報告が予定されていた。またこの都市計画会議では国外から当時の有名建築家を招聘しようとしていたため²⁰、国外の建築状況に関する情報収集と各国の有名建築家ならびに建築家団体との接触を試みる指示が出されている²¹。アルヒーヴ資料ではル・コルビュジェと B. タウトへ宛てた会議への招待状のみが残っているが、おそらく他にも幾人かの建築家に招待状を出したことが推測される。この都市計画会議は実施されることがなかったが、その内容の

多くは第一回全ソヴィエト建築家大会に継承されている。

第一回全ソヴィエト建築家大会は1937年に開催され、社会主義リアリズムが党の方針として確定した後に初めてソヴィエト建築界で催された最大規模の建築会議である。今まで述べてきたように、CIAMと全ロシア都市計画会議の内容を引継ぎながらも、よりソヴィエト独自の路線をその内容に反映させている。この会議は建築界での社会主義リアリズムを確認すること、つまり現行の都市計画や建設がいかんしてイデオロギイ的観点から位置付けられるかという報告と議論がなされた。だが、実際には各都市や構成共和国から集った建築家達の報告会に過ぎなかった。

それでも、この会議を実施するにあたり、ソヴィエト建築家同盟は先に挙げてきた二つの建築関連会議よりも長い期間を掛けて準備をしている。この建築家大会の構想が登場するのは、CIAMとの交渉が行われていた1932年12月11日からである²²。当初は全ロシア建築家大会として、その審議内容がソヴィエト共産党中央委員会書記及びモスクワ市第一書記のL.カガノーヴィチに報告されている²³。このように政治局員へ会議内容を報告するという点は、前記してきた二つの大型建築会議では最終決定に絡む報告のみが上層部に報告されていた点と大きく異なっている。ここから全ソヴィエト建築家大会が単に大規模であったというだけでなく、政治的に重要な意味を持っていたこともわかる。

一方でソヴィエト主導の国際会議という性質をも残しており、この点が現れているのは外国人建築家ないしは団体の招聘におけるプロセスである。例えば、招聘対象にはソヴィエトに対して友好的な建築家だけでなく、CIAMのメンバーや1910年代の現代建築が広まる前の旧世代に属する建築家も含まれている²⁴。当時ソヴィエト建築界が目指していた歴史主義建築を基にした方向性と相入れない勢力をも国外から引き入れることで、ソヴィエト建築界の路線が他国からも認められているという正当性を主張しようとしていたことがうかがえる。

最終的にはソヴィエトに対してある程度好意を持っていた建築家が多く招待されることとなったが、その中でもF.L.ライトが際立っている。彼はニューヨークの現代美術館で開催された展覧会「インターナショナル建築」で現代建築の旗振り役として紹介されていたが、ソヴィエト建築界では「古い世代ながらも新たな建築手法を取り入れる建築家」として見なされていたことが、アルヒーフ資料の招聘リストからわかる。F.L.ライトは建築家大会でスピーチを行うことになるのだが、予め用意した英語原稿と翻訳され大会で読み上げられたロシア語原稿では大きな違いがある²⁵。例えば、ソヴィエト宮殿への否定的な感想などは削除されている。一方、この大会に出席した他の外国人建築家に関してはあまり取り上げられることがない。この大会にはCIAMのメンバーが4人参加しており、同時期にパリでCIAM第五回国際会議が開催されていることを考慮すると、出席者はこの大会を自らが属するCIAMと同じく重要視していたということがわかる。CIAMからの出席者については当時の建築雑誌から知ることができるが、彼らが同時期のCIAM第五回国際会議に出席できるようソヴィエト側が最大限の便宜を図っていることはほとんど知られていない²⁶。それほどソヴィエト建築界としてはCIAMのメンバーをソヴィエト建築家同盟大会に出席させたかったのであり、この点はアルヒーフ資料によってしか知ることができない。また、こうした経緯からソヴィエトに友好的な外国人建築家と同じく、CIAMメンバーがソヴィエト建築界に

とって重要であったということがわかるであろう。

このように、アルヒーヴ資料を活用することであまり知られていない事実を把握することができるのは確かであるが、それは単一の事象を深く理解できるといふことにとどまらない。むしろ、このような資料を活用することで、全体主義体制という状況下では見出すことが難しい他の事象とのつながりを見出すことができる。その好例となるのが、ソヴィエト建築界の文脈で分類された「ソヴィエトの「友人」」のみならず、敵対的もしくは既に過去のものとしてソヴィエト建築に相応しくないとされたモダニズム建築との関係である²⁷。それが当時のソヴィエト建築を積極的に宣伝し、当時対外交流を推進していた全ソヴィエト対外文化協会のアルヒーヴ資料から導かれた点である。しかし、こうした資料によって得られた事実と一般的な理解との相違に着目することも肝要である。本稿のはじめでも言及したが、1930年代のソヴィエト建築界の状況は公の情報に依拠すれば、歴史主義建築の再評価、モダニズム建築の排除にあったということになる。だが、アルヒーヴ資料に基づく、建築分野における対外交流は必ずしも同じ路線で進められてはいなかったことがわかる。この一般的な理解とアルヒーヴ資料による相違が意味するのは、次のようなことであると考えられる。全体主義体制下においても建築界では対外交流は活発であり、それも公には容認しがたい、一定のコンセンサスから外れる部分にまでその交流を広げており、そのことが公の建築界における方向性を修正する安全弁の役割を果たしていたのではなかろうか。このことは社会主義リアリズムという芸術上の教義が、建築分野においては厳密な様式やスタイルによって規定されなかったことを意味する。確かに、歴史主義建築ないしは古典主義建築の再評価そしてその習得ということが建築界では唱えられていた。だが、実際には当時のドイツのようにモダニズム建築が完全に排除された訳ではない。ある基準の下に個々の建築プロジェクトや建造物はソヴィエト建築として認定されていった。この基準については、本稿ならびに現段階で言及することは避けるが、公の見解の行き過ぎを調節するための安全弁として機能していた対外交流がここで寄与していることは確かであると言える。この点を検証するには建築界の公における見解とアルヒーヴ資料に記録されたそれに伴う活動や動きの相違点をより厳密に精査しなければならない。この点は次稿において取り上げていきたい。

註

- 1 Союз советских архитекторов, Дворец Советов, М., 1933, С.56.
- 2 Центральный Архив Города Москвы (ЦАГМ), ф.694, оп.1, д.10, л.221.
- 3 ЦАГМ, ф.694, оп.1, д.43, л.9-13.
- 4 Государственный Архив Российской Федерации (ГАРФ), ф.7523, оп.9, ед.хр.376, л.5.
- 5 ГАРФ, ф.5446, оп.25, ед.хр.2287, л.4-6.
- 6 ГАРФ, ф.5446, оп.86а, ед.хр.10686, л.13-15.
- 7 ГАРФ, ф.3316, оп.25, ед.хр.1008, л.51.
- 8 СОЮЗ СОВЕТСКИХ АРХИТЕКТОРОВ ИНФОРМАЦИОННЫЙ БЮЛЛЕТЕНЬ, 1933, январь, С.10.
- 9 Российский Государственный Архив Литературы и Искусства (РГАЛИ), ф.674, оп.2, ед.хр.21, л.263-290.

- 10 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.21, л.262.
11 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.22, л.1.
12 ГАРФ, ф.5283, оп.6, ед.хр.519, л.13-14
13 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.50, л.48.
14 *Самохина Т.Н.* К истории несостоявшегося Международного конгресса современной архитектуры (СИАМ) в Москве, Советское строительство 1920-30-х годов, М., URSS, 2008, С.29-37., Eric Mumford, *The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960.* Cambridge: MIT Press, 2000.
15 РГАЛИ, ф.2606, оп.1, ед.хр.154, л.18-20.
16 Mumford, *op.cit.*, P.65.
17 РГАЛИ, ф.674, оп.1, ед.хр.15, л.35-38, ГАРФ, ф.3316, оп.25, ед.хр.1028, л.80-83 об., л.92-93:ГАРФ, ф.5283, оп.12, ед.хр.189, л.200-201.
18 РГАЛИ, ф.674, оп.1, ед.хр.15, л.11.
19 РГАЛИ, ф.674, оп.1, ед.хр.15, л.12.
20 ГАРФ, ф.5283, оп.12, ед.хр.46, л.191, л.242.
21 ГАРФ, ф.5283, оп.12, ед.хр.46, л.191.
22 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.2, л.10.
23 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.2, л.3-5 об.
24 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.22, л.1-2, л.28-45 об., л.47-65, л.99-101 об., л.124-127, л.138-139. л.178-178 об.
25 РГАЛИ, ф.674, оп.2, ед.хр.50, л.8-11, л.20-25.
26 РГАЛИ, ф.694, оп.2, ед.хр.22, л.182, л.187.
27 РГАЛИ, ф.694, оп.2, ед.хр.47, л.30.